

抜糸前の術後シャワー浴に対する患者の意識調査

1 病棟 5 階西

岡手朋子, 片山利枝, 石川知子, 宇多川文子

はじめに

術後シャワー浴は患者自身が爽快感を得られ、清潔ニードの充足や早期離床がすすみ回復促進につながるともいわれており、現在一外科でも、術後患者に抜糸前のシャワー浴を実施している。実際には抜糸まで創部を消毒しガーゼを貼用する事や、医師が術直後よりカラヤヘッシブを使用するケースが多く、創部を被覆した状態でのシャワー浴を実施していた。

しかし、術後 4 8 時間経過していれば創部は表皮が形成され被覆しない状態でのシャワー浴は安全かつ有効であるとすでに報告されている。そこで、当科でも効果的な術後シャワー浴を行うために、創部を被覆しないシャワー浴に取り組む必要があると考え、患者の術後シャワー浴に対する意識調査を実施し、実際にシャワー浴に影響する要因を明らかにするために本研究に取り組んだ。

I. 研究方法

1. 調査期間：平成 17 年 6 月～7 月

2. 調査対象

一外科に手術目的で入院し研究に同意を得られた患者 30 名。ただし、術後の循環が不安定な心臓・血管系の患者は対象外とした。有効回答 26 名（男性 12 名、女性 14 名）、平均年齢 67 歳。

3. 調査方法：独自に作成した質問用紙（記述・選択式）を用いた意識調査

手術前に、入浴・シャワー浴の習慣、術後シャワー浴に関する認識や希望（実施日・被覆剤使用など）を調査した。術後 4 8 時間経過した 3 日目に、シャワー浴実施の希望を再度確認し、実施した。その後、シャワー浴の実施状況（実施日・被覆剤使用の有無など）や術後シャワー浴に関する意識を再度調査した。尚、シャワー浴時の創部の被覆に関しては、患者の希望を優先させた。

4. 倫理的配慮

患者に紙面で研究の主旨を説明し、了承を得た。また、研究への参加は自由であり参加・不参加によって不利益が生じないことを説明した。アンケート調査は無記名で行い、回収したアンケート用紙は研究者が管理し、情報の漏洩を防止した。

II. 結果

1. 入院前に入浴・シャワー浴の習慣

日常の清潔行動として、毎日入浴やシャワー浴をしている人は 24 名（92%）で、1～2 日おきに入浴している人は 2 名（8%）だった。入浴のみでシャワー浴の習慣がない人は 14 名（54%）だった。

2. 術後シャワー浴に対する認識

術後シャワー浴について知っていた人は 7 名（27%）だった。そのうち、術後シャワー浴を必要と思っていた人は 6 名、どちらでもない 1 名だった。また、術後シャワー浴について知らなかったのは 19 名（73%）で、術後シャワー浴の有効性の説明を聞いて必要と思った人は 11 名、どちらでもないのは 5 名、必要と思わなかった人は 3 名だった。

3. 術後シャワー浴の実施日

術前の調査では、術後シャワー浴が実施できると思う日は3～4日目が10名（38%）、5～6日目は7名（27%）、抜糸後7名（27%）、無回答が2名（8%）だった。

実際のシャワー浴実施は、術後3～4日目が19名（73%）、5～6日目が5名（19%）だった。その他体力の回復が早く術後2日目にシャワー浴を希望した人が2名（8%）あったため、創部を被覆しシャワー浴を実施した。シャワー浴実施の平均は術後3.7日目で、26名全員が抜糸前シャワー浴を行った。

シャワー浴実施後の調査では、術後シャワー浴実施日として妥当なのは3～4日目が14名（54%）、5～6日目が8名（30%）、抜糸後が2名（8%）で、無回答が2名（8%）だった。

4. 術後シャワー浴実施後の感想

シャワー浴実施後の肯定的な感想は「気持ちよかった」25名（96%）、「元気になった」20名（77%）、「自信が付いた」24名（92%）で、その他「医師・看護師からの説明で納得でき不安がなかった」「傷にしみて痛そうと思ったが、（シャワー浴）試してみたら不安は取れた」という意見があった。また、否定的な感想は「疲れた」5名（19%）、「怖かった」6名（23%）、「もうしたくない」2名（8%）で、「傷が開いたりしないのだろうか」「感染するのではないか」という意見もあった。

5. 創部の被覆

術前の調査では、創部を被覆しない術後シャワー浴を希望した人は10名（38%）だった。そのうち実際に創部を被覆せずシャワー浴を実施したのは3名で、7名は創部を被覆してシャワー浴を実施した。また、創部を被覆するシャワー浴を希望した人は16名（62%）で、創部を被覆して実施したのは7名、9名は創部を被覆せずシャワー浴を実施した。

術前の希望に関わらず、創部を被覆せずシャワー浴を実施したのは12名（46%）で、理由は「清潔を保てると思ったから」7名（27%）、「感染が少ないと聞いたから」5名（19%）「看護師がすすめるから」5名（19%）などがあった。創部を被覆するシャワー浴を実施したのは14名（54%）で、理由は「創部が感染しそうで怖いから」2名（8%）「傷にしみて痛そうだから」3名（12%）「傷が開きそうで怖いから」3名（12%）などがあった。

III. 考察

術後シャワー浴について知っていた人は7名と少なかったが、知らなかった19名のうち術前の説明で11名は術後シャワー浴の必要性などを理解し、術後シャワー浴が実施できている。「医師・看護師からの説明で納得でき不安がなかった」という意見からも、入院時から説明していくことで患者の受け入れが良くなると言える。しかし、必要性を理解できなかった人も8名いた。これは、シャワー浴の習慣がないことや、術後の回復過程がイメージできなかったためではないかと考える。術前から、具体的な創部の治癒過程や術後経過の情報提供が必要であり、理解度を確認しながら術後シャワー浴を勧めていくことが重要である。

術後シャワー浴の実施日については、術前の調査では3～4日目が妥当と答えていた人は10名だったが、術後の調査では14名だった。これは術前に想像していた術後のイメージよりも実際の術後の状態が良かったことや、シャワー浴に対して「気持ちよかった」「元気になった」「自信が付いた」などの肯定的な意見が多かったことからわかるように、患者の気持ちが前向きに変化したためと考える。また、研究期間が夏の暑い時期であり、保清に対する欲求が高くシャワーにかかりたいという患者の積極的な思いが反映された結果と言える。

しかし、術後の調査では、シャワー浴は術後5～6日目が妥当と答えた人が8名いた。そのうち5名は発熱や倦怠感や創痛で術後5～6日目までシャワー浴が実施できなかった。「疲れた」「怖かった」「もうしたくない」などの否定的な意見もあった。

また、術後シャワー浴実施後の調査で、抜糸後が妥当であると答えていた人や、「もうしたくない」と答えた人は75歳以上の高齢者で、いずれも入院前にシャワー浴の習慣がなかった。高齢者にとって保清とは入浴のことを意味し、入浴は抜糸後にするものだというこれまでの意識を変えにくいと考える。しかし術後1日目に廊下歩行ができ、3～4日目に術後シャワー浴が介助により実施できるようになった。近年、高齢者の手術件数は益々増加する傾向にある。高齢者にはADLや保清の習慣などを十分配慮し理解した上で、シャワー浴が短時間で行えるよう必要に応じた援助を行うことが重要である。一方では、術後2日目にシャワー浴を実施した人も2名いた。シャワー浴後も問題なく経過しており、術後の状態によっては48時間経過していなくても創部を被覆すれば術後シャワー浴は可能と言える。

患者自身の疲労感や創痛には個人差もあり、シャワー浴を肯定的に捉えられない場合もある。術後シャワー浴の実施日を決定するためには患者の全身状態をアセスメントする能力が必要であり、年齢や生活習慣に応じて効果的なシャワー浴が行えるように援助しなければならない。

創部の被覆に関しては、術前に創部を被覆する術後シャワー浴を希望していた16名のうち9名が、創部を被覆しないシャワー浴を実施している。一方、術前に創部を被覆しない術後シャワー浴を希望していた10名のうち3名のみ、実際に創部を被覆しないシャワー浴を実施している。これは、術前に被覆しないシャワー浴を希望していた人も術後に創部の被覆を希望した場合は、被覆したままシャワー浴を行い患者の希望を優先させたこと、またカラヤヘッシブが術直後から貼用してある場合も多く、積極的に除去していなかったためと思われる。医師が抜糸まで創部を消毒しガーゼを当てている場合も多く、「傷が開いたりしないのだろうか」「感染するのではないか」「傷にしみて痛そう」などの言葉からもわかるように、ガーゼを除去しシャワー浴をする事は患者に不安を抱かせているのではないかと考える。今後、被覆しない術後シャワー浴に取り組むためには、患者の創に関する不安感を解消し、医師とともに術後創に対する共通認識を持ち、そのケアを統一していきたいと考える。

IV. まとめ

1. 患者の術後シャワー浴に対する意識調査を実施しシャワー浴に影響する要因を検討した。
2. 患者は術後シャワー浴についての認識が低く、術前から具体的な創部の治癒過程や術後経過の情報提供が必要で、患者の理解度を確認しながら術後シャワー浴をすすめていく。
3. 術後シャワー浴は、全身状態や年齢・生活習慣が影響するため、アセスメントし実施日を決定し必要に応じた援助を行う。
4. 患者は創に関する様々な不安を抱いており、医療者間で術後創に対する共通認識を持ち、ケアを統一していく。

<参考文献>

- 1) 堀内順子他：創を被覆しない抜糸前シャワー浴の安全性と術後看護における意義，臨床看護研究の進歩，vol. 2，p.28～33，1990.
- 2) 飯森静香他：抜糸前シャワー浴の効果—清潔ニードの充足と早期回復—，第34回，看護総合，p.29～30，2003.
- 3) 川原風砂子他：抜糸前シャワー浴に対する患者の意識調査，第28回，成人看護I，p.38～41，1997.
- 4) 小倉嘉子他：腹式帝王切開術後抜糸前シャワー浴開始の検討，第33回，母性看護，p.69～71，2002.
- 5) 藤本和子他：虫垂切除術・腹腔鏡下胆嚢摘出術後のシャワー浴時期に影響する周術期因子—術

- 後の早期シャワー浴に向けて一，第 33 回，成人看護 I，p.92～94，2002.
- 6) 丹治恵美子他：婦人科疾患術後患者のシャワー浴開始時期の検討—抜糸前シャワー浴の安全性と有効性の確認—，第 27 回，成人看護 I，p.79～81，1996.